

提案主題 特別の教育課程を編成し、9年間を見通した教育活動における教頭の役割

協議の柱 教頭として、小中一貫教育や小中連携教育を組織的に推進し確立するには、どのように関わればよいのか。

提言者 豊後高田市立戴星学園(中) 小田豊昭

1 質 疑 なし

2 協 議

(1) 主な質疑・応答

Q 小中兼務制における授業への入り方を知りたい。

A 〈中→小〉は、算・理・外・音・家にT1で指導をすることが多い。音楽は2年～6年で授業を行っている。〈小→中〉は、主にT2で入ったり、習熟度別指導の支援を行ったりしている。

Q 市民科で、学年の枠を超えて行っている活動はあるのか。

A 3年の校区探険に7年生以上が同行して解説します。地域の方を招く戴星祭では学年の枠を超えて出し物を行っている。

(2) 各グループでの協議内容

- ・小中または小中高の連携を行っている地域は、特色あるカリキュラムのもと中1ギャップ解消等の成果をあげている。全学年の系統的な指導内容を熟知し、授業観察を通して指導していく。
- ・全般的に〈小→中〉の交流が少ない現状から、6・3制での限界も感じるのので、小中一貫校・小中連携校で実施されている4・3・2制等へ移行していく時期ではないか。
- ・地域ぐるみで、担当を明確にして組織的に取り組んでいくことが、小中連携教育の推進には欠かせない。職員間のベクトルを揃えるため、厚生活動・懇親会等も大切である。
- ・小中の壁を取り除くには、管理職が中心となって、「小中連携担当」をバックアップしていく。
- ・「小中連携担当」が会議に参加できない際のサポート体制や全職員に情報共有を図る場の設定、連携に係る日程調整、およびその周知徹底等、企画・運営のリーダーとしての役割を果たしていく。

3 指導助言

アクティブラーナーを育てるお手本がない等、「答えのない時代」だからこそ、戴星学園のように今までにない手法を苦勞しながら創り出そうとしていることに敬意を表したい。これからの管理職にとって、以下の3点が求められている。

- ①カリキュラムマネジメント ……「見えないカリキュラム」を含めて、大胆な手法をまずはやってみることが大事。やってみて、考えて変えていく。
- ②メリット・デメリット ……何をすることもメリット・デメリットはあるので、0か100の議論ではなく、80をめざして取り組んでいけばよい。
- ③スクラップ&ビルド ……色々なことを取り入れるばかりでは、きつくなる。例えば、学校経営案を一枚にする等、大事なことは大事にして、いらぬものはやめていかないと新しいことが入らない。

他にも、「見える化」「言える化」等の工夫した取組も戴星学園に学ぶべきものは多い。